

思考が変容する過程を可視化する授業

～国語科における深い学びの実現～

相田 浩史（教育実践コース）

1 課題意識

筆者がこれまでに行った授業では、教員が内容や知識を説明することに割かれる時間が多く、生徒が思考する時間や深める場面が確保されていないという問題があった。

自分で課題をみつけること、視点を変えて問題をみることの重要性は筆者自身のこれまでの学びの中で強く感じており、このことを生徒に伝えられるような授業づくりを考えたいと感じ、そのための手立てを探ろうと考えた。

2 研究の概要

本研究において目指すのは、「国語科における深い学びの実現」である。

筆者は、深い学びの実現のためには、生徒の思考の変容を可視化することが必要であると考え、思考を可視化するためのツールについて分析を行い、それらを用いて実践を行った。

3 国語科における深い学びとは

(1) 言葉に対する見方・考え方

『中学校学習指導要領解説 国語編』には、「言葉で表される話や文章を、意味や働き、使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて言葉に着目して吟味する」とある。

ここでは、見方・考え方は明確に区別されていない。しかし、実際に授業づくりをするに当たっては、それぞれを働かせる場面を意図する必要があると考える。見方を働かせたにもかかわらず考える活動がなければ学びは深まらず、見方なしに考えてもそれは国語科の授業であるとはいえないからである。これらを区別し、見方・考え方を働かせる場面を設定することで深い学びを実現する授業づくりが実現すると考える。

そこで見方・考え方の分け方について、中村(2018)を参照して考えた。

【言葉による「見方」】

＊言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えること
＊話や文章を捉える言葉の様々な側面

【言葉による「考え方」】

＊話や文章に表れる対象と言葉、言葉と言葉の関係などを、総合的に思考・判断すること
＊話や文章の内容や表現について、言葉に着目して吟味すること

見方とは、序論・本論・結論や意味段落といった文章構成を捉えたり、接続語や語尾に着目したりして、言葉の意味や役割を読みとることを指す。

考え方とは、見方を働かせて言葉に着目し、内容や表現について吟味して考えるということを指す。

学習指導要領では、見方・考え方を働かせるための具体的な方法として〔知識及び技能〕〔思考力・判断力・表現力等〕の指導事項が設定されている。〔知識及び技能〕を獲得させ、それを生かして〔思考力・判断力・表現力等〕を育成していくことが深い学びへとつながっていくのである。

(2) 国語科における深い学び

深い学びとは、学びがその場限りのもので終わらずに、様々な場面で活用される汎用性の高いものになることを指す。

獲得した言葉による見方・考え方をどのように働かせていくのかということを、例を挙げながら考えていく。

話や文章の構成についての〔知識及び技能〕では、第一学年で指示する語句と接続する語句の役割、第二学年で話や文章の構成や展開、第三学年で話や文章の種類とその特徴について理解を深めるよう示されている。

初めてこれらを学習するときには、教員や教材によってその項目に意識を向けさせられることになるが、その段階の先、教科書の別の文章や日常の読書の中に「この文章は前読んだ文章と同じ構成になっているな」という気づきがあり「どうしてこの構成なのだろう」「どんな効

果があるのだろう」といった思考につながっていく。

あるいは自身で文章を書く活動を行うとき、「あの文章の構成はわかりやすかったから参考にしよう」「ここを強調するために接続詞を工夫しよう」というように活動が変わったとしても活用できる見方・考え方として生徒に定着していく。

〔知識及び技能〕が特定の場面から離れ、見方・考え方として様々な場面において活用され、思考へとつながっていく一連のプロセスが深い学びであり、そのためには、獲得した見方・考え方が生徒の中ですぐに活用できる状態になっていることが求められる。

4 生徒の思考を捉える方法の検討

1年時次前期には、附属新潟中学校の取組を観察する課題発見実習を行った。その中で実際に行われている取組から課題意識とつながるものを得た。

附属新潟中学校の実践では、生徒が自分の学習を振り返り改善していくことを特に重要視している。

生徒自身が達成したい目標とする姿を目標として書き出し、その実現のために必要な資質・能力は何か、どういった力をつけていけばよいのか、そのためにはどういった方法をとる、どのような努力をするべきなのかということを生徒自身に考えさせる。その都度、現状の改善のために振り返り、最初に設定した資質・能力や取組の方法についての再設定を行う。

最終的には、目標に対しての達成度を自己評価し、達成できた点、できなかった点を明らかにする。獲得した力がここで明らかになり、生徒は学びの実感を得ることができる。そして、成果を踏まえた上で次の活動への取組を考えていくことになる。この繰り返しによって各々の活動が切り離されることなく、一貫して実生活でも活用できる資質・能力として生徒たちの中に根付いていくことになる。

こうした振り返りを効率的に行うためには自身の学びを自覚化する必要がある。そのための手段として思考ツールが有効なのではないかと考えた。

思考ツールとは「思考の過程や枠組を可視化したワークシートや図・表などの総称」であり、「思考スキル(Thinking Skills)をわかりやす

く、しかもその過程を意識させるための教育方法として広がってきた」(鈴木 2005)ものである。

附属新潟小・中学校でも実践に取り入れられているほか、多くの実践が報告されているツールである。

(1) 思考ツールの整理・分析

思考ツールには多くの種類があり、同一の図を指していても研究者によって名称が異なるという場合もある(例 ベン図⇔ダブルバブルマップ)。また、独自の使用法、ツールを用いる場合もあり一口に思考ツールといってもその形態は多岐にわたる。

しかし、現在日本で一般的に使用されている思考ツールは、関西大学附属初等部による分類、分類に携わった黒岩(2012)の研究を基にしているものが中心である。

関西大学附属初等部による分類

- | |
|---------------------------|
| ①比較する…ベン図 |
| ②分類する…Xチャート, Yチャート |
| ③多面的に見る…くま手図, お魚ボン図 |
| ④関連づける…コンセプトマップ |
| ⑤構造化する…なぜなにシート, ピラミッドチャート |
| ⑥評価する…PMI 分析表 |

本研究でも関西大学附属初等部、黒岩(2012)による分類を基に実践を行った。

(2) 本研究で使用した思考ツールの紹介

〔KWL チャート〕…自身の読みを、知っていることは何か(What I know)、知りたいことは何か(What I want to know)、知ったことは何か(What I learned)の三つに整理し、読みを可視化するツール。

〔一枚ポートフォリオ〕…一枚ポートフォリオ評価法は、堀・早川(2002)による実践として発表された。学習者が学習の履歴を記録し、認知過程の外化と内化を促すことで学習と評価の一体化と学習者の資質・能力の向上を狙う。

〔Y チャート〕…多面的に捉えることを助けるツール。Yチャートの場合全ての項目同士が隣り合うように配置されており、書き込みがしやすくなっている。これが縦割りの表にはないメリットである。

〔フィッシュボーン〕…左端に主題を書き込み、中央部に項目ごとの考え方を書きこんでいく。これによって様々な視点からの分析を助けることができる。

(2) 国語科での使用方法

中学校国語科の教科書で扱われている文章は、「説明的文章」と「文学的文章」の二種類に大別することができる。前者は説明文、論説文であり、後者は物語文、随筆、詩歌である。

またこの二つの違いについて、『中学総合的研究 国語』の中では「文学的文章は読者の感動を目指すために書かれる文章であり、説明的文章は読者の理解を目指すために書かれる文章である。」と述べられている。

文章の種類によって、書かれたねらいが異なるということは、生徒が目指すべき姿もそれに対応させていくべきであり、そのために使う思考ツールも別個に検討する必要がある。

① 説明的文章

説明的文章で重要なのは「筆者」（本稿の筆者と区別するために「筆者」と表記する）の主張を正確に読みとるということである。自分がどのように受け取ったかということではなく、「筆者」が何を伝えたかったのかということを言葉から読み進めていかなければならない。

そのためには、「自分がどのように文章を読んだかを客観的に捉えること」「筆者がどのような意図をもって文章を書いたのかを考える」ことが重要であると考えた。

② 文学的文章

これに対し文学的文章では、内容を理解しようとする段階から、自分の解釈を積極的に行っていくべきであると考えた。これは、文学的文章では抽象的な表現を多用し、感情を想像させ読み手にその解釈を委ねようとする場合が多々あるためである。

5 実践の紹介

実践と使用したツール

No	単元名	思考ツール
I	附属新潟中の観察	KWL
II	作られた物語を越えて (中3 説明的文章)	
III	誰かのかわりに (中3 説明的文章)	一枚ポート フォリオ
IV	月に起源を探る (中3 説明的文章)	Yチャート
V	初恋 (文学的文章)	フィッシュ ボーン

(1) 実践Ⅱ 生徒の思考を可視化する試み

読みの可視化をねらい、KWL を使用した実践を行った。

L の記述からは、生徒がどのようなことに関心をもっているかということが分かる。初発の感想として特に区別なく記述させるよりも視点が整理されており、K から生徒一人一人の知識量を把握でき、W から生徒の学びたいことを把握することができた。

また KWL のシートから授業を展開していくことによって生徒の関心がどこにあるのかを教員が把握しやすくなっており、授業の修正をするのに役立てることもできる。加えて、生徒自身初読の段階での自分の考えを見返すことができ、単元終了後の姿との比較する視点として KWL を使うこともできると考える。

しかし、これだけでは生徒の振り返りを十分に促すことはできない。

また、活動ごとの可視化ではその授業時間の思考の可視化はできるが、単元を通しての変容、「思考の過程」を可視化することができない。これらの課題を踏まえて実践Ⅲに臨んだ。

(2) 実践Ⅲ 思考の変容を捉える試み

単元を通しての変容を可視化する手立てとして一枚ポートフォリオを使用した。

このツールを活用することで、一目でこれまでの学習を振り返ることができるのは生徒の学びにとってプラスに働いた。筆者がコメントを書いて返すことで、生徒は毎時間、前時の自分の学びを読み返していた。また、ノートや学習プリントとは別に、自分の学びだけを記録しておけるものがあることで、より焦点化して学びを振り返ることができていた。

一方、課題ではなく活動の振り返りを書いている生徒、できた・できないといった短文で終わってしまう生徒も見受けられた。毎時間の学習活動が異なる中で、単元としてのつながりを意識させるためには、生徒自身の学びへの自覚を高めるような授業にする必要がある。

(3) 実践Ⅳ 生徒の学びを自覚化する試み

読み取ったことの可視化だけではなく、読み取り方への自覚が深い学びには必要であると考え、可視化の手段として Y チャートを用いた。

読み方を思考する場面で Y チャートを活用し、初発と対話後の比較、初発と学習を終えての比較を行うことで考え方の変化を明らかにした。

また、異なる読み方であっても読み取れる情報が同じになる部分もあるということに気づ

くことで、「筆者」の伝えたいことをより正確に読み取れるようになった。

チャートごとの比較からも、記述の増加、読み取りの正確性の向上が明らかになっており学びへ自覚を高める手段として有効に働いたといえる。

また、学習事項を活用する場面としてレポートの記述を設定する見方・考え方を働かせ深い学びに到る姿を可視化することができた。

(4) 実践Ⅴ 考えの形成を促す試み

実践Ⅴでは、文脈の中での語句の意味を考えることに、分析するスキルを働かせるフィッシュボーンを使用した。

文学的文章では、作者の意図はあるものの、一つの言葉に複数の意味をもたせていたり、ある程度幅をもたせた解釈ができるように描写していたりする。だからこそ、文学的文章をより味わうためには語句を分析していくことが不可欠であると考ええる。

フィッシュボーンを用いたことにより、一つの語句に対しての捉えを広げることができた。それは、本単元のゴールである創作詩にもよく表れている。創作詩には自分の表現したい気持ち、中学校生活の思い出やこれからの不安を象徴に喩えて丁寧に表現することができている。

楽しさや不安などをそのままストレートに言葉にするのではなく、象徴の姿を借りて表現するという見方・考え方は、学習と密接にかかわりあっているものである。

6 実践を通して明らかになったこと

深い学びを達成するためには、思考の可視化が有効であると考えて二年間の実践を行ってきた。その中で明らかになったのは、深い学びにはただ可視化をするだけでは不十分であり、その他にもいくつかの要素が必要であるということである。それが実践の中で明らかになった。

一つは思考の変容である。ただ読みとったことを可視化するだけでは、単元のつながりを意識することができずに、一時間一時間の中で意識が完結してしまうことが分かった。自分の思考の変容を捉えようとすることで前の時間との関連を意識しながら授業に臨むことができるようになる。

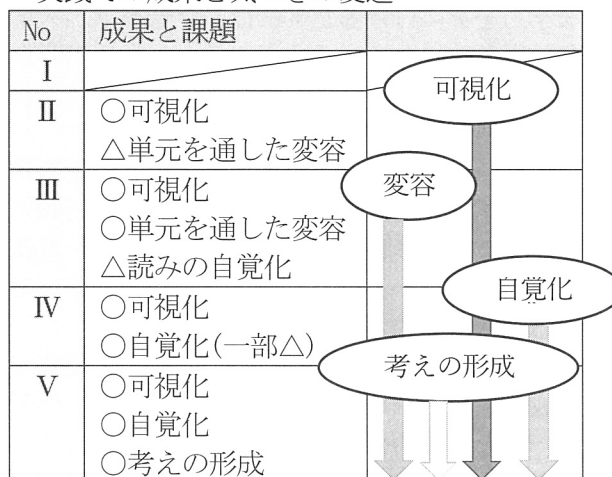
二つ目は学びの自覚化である。学びが深まる＝活用できる知となるためには、学んだことの自覚化が不可欠である。可視化はこれを助ける

が、実際にそれらを使った活動を取り入れ、学びの自覚化を促さなければ、生徒はその有効性に気づかず、学んだ内容もあやふやになってしまう。

三つ目は考えの形成である。自覚化と重なる部分もあるが、獲得した知を自分のものとして活用することが出来なければ深い学びとはいえない。授業によって深い学びが達成されるためには、学びを自分のものとして活用する姿を可視化して示さなければならない。

実践を通じて、学びを深める授業づくりにはこの4点を意識する必要があると考えた。

実践での成果と気づきの変遷



7 まとめ

(1) 今後の課題

実践の中では考えの形成を優先し本文の理解がおろそかになってしまう、低位の生徒を含めた学級全体に意図が伝わらないという課題も残った。

また、深い学びに必要な要素を全て取り入れた授業づくりを実現する構成員や授業の運営能力が現状では不足しており、その点を含め実践力を高めていく必要がある。

(2) まとめ

当初の課題意識に対しては、実践を通して一つの答えが得られたと考える。

課題を生徒が自ら発見できるように思考の可視化を行い自分の現状を把握できるようにする。

自分の学びを客観視し、自覚化することで深い学びを目指す。

実践によって、こうした姿を実現するために必要なことを把握することができた。今後の授業づくりにこの学びを生かしていきたい。